

山王囲遺跡調査図録

宮城県一迫町教育委員会

山王囲遺跡調査図録

1985

宮城県一迫町教育委員会



藍胎漆器の出土状態

序

山王開遺跡は、古くから土器や石器が出土することで知られていた遺跡であります。昭和3年旧制染館中学校時代の歴史の先生をしていた池内儀八先生により旧東京帝国大学から発行された「日本石器時代遺物発見地名表」に「一迫村真坂山毛から上器・上偶・石鐵・石斧・石皿・石錐・凹石などが出土した」と報告されています。

本格的な発掘は、昭和38年に統合一迫小学校の建設に際しボーリングしたところ体育館建設予定地内から縄文土器や獸骨が出土して遺跡が校庭のはうまで広がっていることが解ったことにはじまります。

教育委員会では、屋内体育館の建設に先立ち遺跡の学術調査を当時長崎診療所長の興野義一先生（日本考古学協会員）にお願いし発掘調査をしました。

遺跡は、全国でも珍しい貴重な文化財であることが判明し、さらに専門家による徹底した調査が必要となり昭和40年度予算に発掘調査費を計上して東北大学文学部考古学研究室に依頼しました。

東北大学からは伊東信雄教授を筆頭に岸沢助教授以下助手学生13名が来町発掘にあたり、その結果縄文時代晩期から初期弥生文化層に至る移行が層位的に判明する包含層であることが解りました。

泥炭層から2000年前の完形上器をはじめ籠胎漆器や編布など多量の埋蔵遺物が出土し極めて貴重な遺跡として全国的にもたかく評価されています。

この縄文時代の偉大な生活文化の所産を後生に末永く保護するため昭和51年度より10ヶ年にわたり山王開遺跡環境整備事業を施行し史跡公園として整備してきました。さらに今回、この遺跡の発掘調査の記録を「調査図録」として公表することとなりました。

この図録刊行にあたりご指導・ご援助をいただいた元東北大学部教授伊東信雄先生並びに直接編集に携わっていただきました東北大学文学部考古学研究室助教授須藤隆先生に対し心から深く感謝の意を表します。

終わりにこの図録集が学術研究のみならず学校教育社会教育及び広く一般の方々に活用いただければ幸いと思います。

昭和60年3月

一迫町教育委員会

教育長 佐藤英夫

目 次

はじめに	1
1 山王廻遺跡の概要	2
1. 自然環境	2
2. 周辺遺跡の状況	3
3. 遺跡の立地条件	4
2 発掘調査の概要	6
1. 調査の経緯	6
2. 調査の目的	7
3. 調査方法	9
4. 層序関係	10
5. 出土資料	11
3 調査の意義	14

挿 図

図1 山王廻遺跡位置図

図2 山王廻遺跡地形図

図3 山王廻遺跡発掘調査区配置図及び断面実測図

図4 山王廻遺跡西区東壁断面実測図

原色図版

- 図版 1-1 山王闕遺跡とその周辺の航
空写真
- 図版 1-2 山王闕遺跡とその周辺の航
空写真(東から)
- 図版 2-1 山王闕遺跡発掘区近景(西
から)
- 図版 2-2 西区調査区の状況(南から)
- 図版 2-3 西区調査区の状況(西から)
- 図版 3-1 東区(I~K区)の西壁断面
- 図版 3-2 西区(U~W区)の西壁断面
- 図版 3-3 西区T区IVa層上面の石開
炉(西から)
- 図版 4-1 K区XVII層出土彩文籠胎漆
器
- 図版 4-2 R区VIb層出土彩文籠胎漆
器
- 図版 4-3 VI層出土彩文籠胎漆器
- 図版 5-1 I区XIV層出土採文籠胎漆
器
- 図版 5-2 O区Vc層出土彩文籠胎漆
器
- 図版 5-3 VI層出土朱塗り貝製品
- 図版 6-1 E区山上籠胎漆器
- 図版 6-2 K区XVII層出土籠胎漆器
- 図版 6-3 彩文籠胎漆器断面出土状態
- 図版 7-1 E区XXIII層出土黒・朱塗
り貝製品
- 図版 7-2 彩文籠胎漆器の出土状態
- 図版 7-3 H区層朱塗り櫛の出土状
態
- 図版 8-1 M区VIIa層朱塗り櫛の出土
状態
- 図版 8-2 朱塗り櫛出土状態
- 図版 8-3 E区XXIII層朱塗り製品の
出土状態
- 図版 9-1 I区XXV層編布出土状態
- 図版 9-2 編 布
- 図版 9-3 E区XXV層朱塗り紐出土状
態
- 図版 10-1 朱塗り紐の出土状態
- 図版 10-2 J区XIII層種子類出土状態
- 図版 10-3 P区V層獸骨出土状態
- 図版 11-1 G区XX層遺物出土状態
- 図版 11-2 H, L区XXV層遺物出土状
態
- 図版 11-3 発掘調査の状況

写 真 図 版

第 1 図版	遺 跡 遠 景	第 20 図版	西区遺構検出状況
第 2 図版	東 区 壁 面	第 21 図版	西 区 炉 跡
第 3 図版	東区山王Ⅲ層式期埋め甕	第 22 図版	西区石組み遺構
第 4 図版	東区土器出土状態	第 23 図版	西区石組み遺構
第 5 図版	東区遺物出土状態	第 24 図版	内区遺物出土状態
第 6 図版	東区遺物出土状態	第 25 図版	西区土器出土状態
第 7 図版	東区遺物出土状態	第 26 図版	西区土偶出土状態
第 8 図版	東区遺物出土状態	第 27 図版	西区遺物出土状態
第 9 図版	東区遺物出土状態	第 28 図版	西区石組み遺構
第 10 図版	東区遺物出土状態	第 29 図版	西区上器出土状態
第 11 図版	東区籠胎漆器出土状態	第 30 図版	西区上器出土状態
第 12 図版	東区籠胎漆器出土状態	第 31 図版	西区遺物出土状態
第 13 図版	東区遺物出土状態	第 32 図版	西区籠胎漆器
第 14 図版	東区遺物出土状態	第 33 図版	西区籠胎漆器出土状態
第 15 図版	東区遺物出土状態	第 34 図版	西区籠胎漆器出土状態
第 16 図版	東区遺物出土状態	第 35 図版	西区遺物出土状態
第 17 図版	西 区 壁 面	第 36 図版	西区遺物出土状態
第 18 図版	西区遺物出土状態	第 37 図版	西区遺物出土状態
第 19 図版	西区遺物出土状態		

付 図

付図 1 山王Ⅲ遺跡層位別土器組成

付図 2 山王Ⅲ遺跡層位別土器組成

山王圍遺跡

はじめに

山王廻遺跡の調査は、1965年の春から初夏にかけて行われた。この発掘調査によってこの遺跡から縄文時代晩期の編布、藍胎漆器、様々な装身具類、上器、石器、骨角器、木製品など貴重な資料が多数出土した。現在、調査からすでに20年を経過した。この間、1971年9月、文化庁は、この遺跡を、その重要性にかんがみ、国の史跡に指定した。この発掘調査の概要については、すでに機会のあるたびに紹介がなされてきた。しかし、その調査資料全体の研究報告書は、なお未刊であり、現在、作成の途上にある。

1965年の発掘調査以後、伊東の指導のもとに、この膨大な発掘調査資料の整理、分析が、東北大学考古学研究室においてすすめられてきた。そして1971年、伊東が東北大学を退官してからは、芹沢長介教授の指導のもとに整理作業がづけられた。その結果、この遺跡から出土した資料の分析結果が徐々に蓄積された。そして、現在、資料化のおおじがほぼ確定するに至った。

このような状況をふまえ、1984年、伊東と須藤は、一迫町教育委員会と協議し、この報告書を作成するための具体的な作業にとりくむこととした。その出土資料は、多岐にわたり、また膨大な量に達するため、これを一括で公表することは、きわめて困難と判断された。そのため、土器型式のまとめを考慮し、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層と、層位ごとに出土資料の内容を分冊にして報告していくこととした。このような基本方針が決定され、報告書の作成作業が始められた。

また、発掘調査から20年を経ており、調査記録類のうち、ネガカラー、カラースライドに色調変化を起こしたものがあり、写真資料が公開できる限界に達している。そのため、報告書の刊行にさきだって、この発掘時の写真類を基礎資料として、できるかぎり早い段階に公表することが必要と判断された。このような判断にもとづいて、山王廻遺跡における発掘調査の記録を、撮影した写真類を中心、「図録」として可能なかぎり全体的に公表することとした。

今回の資料集では、発掘時の記録写真の中から180枚を選択し、さらに、115枚を選び、掲載した。実測図は、関連する遺構についてのみかげた。

これまでこの史跡の保護にあたってきた一迫町教育委員会は、この重要な遺跡、その出土資料をひろく一般に公開し、史跡公園としても活用していくために、山王廻遺跡の報告書の刊行を強く望んでいた。そのため、きわめて強い熱意をもってこの事業の遂行に努めてきた。本資料の刊行が可能となつたのは、教育委員会の熱意と努力によるところが大きい。

1. 山王囲遺跡の概要

1 自然環境

山王囲遺跡は、宮城県栗原郡一迫町真坂山王囲、道溝に所在し、縄文時代から弥生時代にかけて營まれた集落遺跡である。

一迫町の北西方にそびえる栗駒山は、奥羽脊梁山系における秀峰のひとつであり、秋田、岩手、宮城県にまたがる標高 1628 m の休火山である。この火山噴出の石英安山岩を基盤とする栗駒山の西南、東南、東南の山麓から、それぞれ一迫川、二迫川、三迫川が流出する。そのうち、一迫川は、25 kmほど山麓を流下し、栗駒山の南麓に河谷を開析し、狭隘な沖積地を形成する。そして 15 kmほど東流して二迫川に合流する。さらに、2 kmほど東へ流れ、三迫川と合し、迫川となる。この迫川は、東南へと流れ、若柳、石越、追、中田、米山、田尻、豊里町にひろがる広々とした沖積地を形成し、約30 kmを自然蛇行し、北上川に合流する。これらの川は、栗駒山山麓における降雨量が比較的多いため、水量が豊富である。また、その流域には自然堤防、後背湿地がよく発達し、独特の景観を形成している。

山王囲遺跡は、この一迫川によって栗駒山とその西南にそびえる荒雄岳(984 m)の山麓、谷間に開析された南北 3 km、東西 15 km ほどのひろがりをもつ沖積地のほぼ中央に位置し、一迫川とその支流長崎川にはさまれた自然堤防上に立地する。この遺跡が所在する沖積地は、標高 30 m から 40 m ほどあり、「真坂面」とよばれ、一迫川下流の「若柳面」より 2 m から 3 m 高い沖積段丘面を形成している(阿子島 1960)。遺跡は、一迫川と長崎川の合流点ちかくにあり、標高 38 m、長崎川の現河床面からの比高は 3 m 程度である。現在でも周囲の水田面より 1, 2 m 高い微高地となっている。

この沖積地の周辺では、その西側から東南側にかけて北川石英安山岩質熔結凝灰岩を基盤とする標高 50 m から 150 m ほどの築館丘陵が起伏をもってひろがる。そのため、この地域は、周囲を丘陵でとりかこまれ、比較的まとまりのよい地形を示している。

この遺跡は、長崎川の形成した東西にのびる幅 100 m 程度の自然堤防の上に營まれた集落遺跡である。遺跡の北側に、一迫川の自然堤防とこの自然堤防の間に形成された後背湿地を有し、ここに泥炭遺跡が形成されている。この山王囲遺跡は、周囲にひろがる丘陵地帯、沖積地の北、西端を流れる河川、自然堤防の後背湿地など、複雑な地形の中核にある。

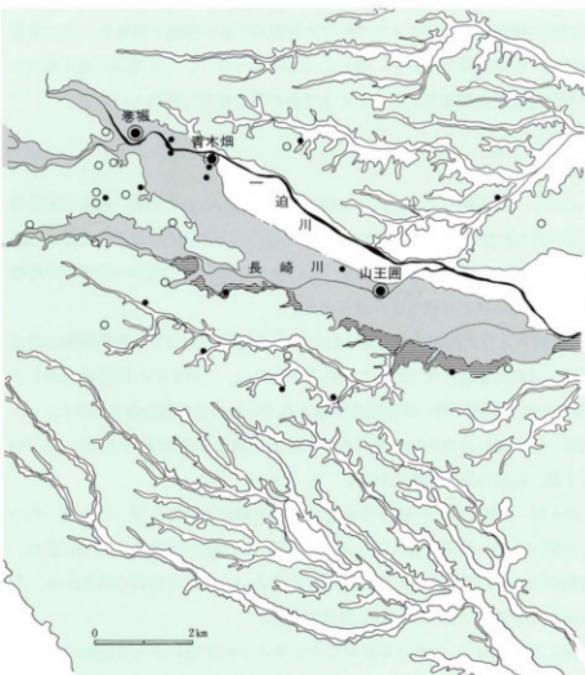
この地域の植生は、今日、ナラ、クヌギ、アカマツが目につく。現在でも、なお河川にはサケの週上をみ、ハクチョウ、ガン・カモ類などの渡鳥が飛来し、丘陵地帯には、キジ、ヤマドリなどの鳥類

1. 山王囲遺跡の概要

やノウサギ、キツネ、タヌキ、ムササビ、イタチなどの野性小動物が棲息するという（一迫町教育委員会 1984）。近年、この地域も開発が進行し、その自然環境は急激に変貌をとげつつある。それでも、なお、比較的恵まれた自然環境を維持しているといえる。

2 周辺遺跡の状況

この遺跡の付近には多くの遺跡が分布している。縄文時代の遺跡としては、一迫川を4kmほどさかのぼった右岸の自然堤防上にある青木畠遺跡が重要な遺跡である。この遺跡は、縄文時代中期、後期の遺物も出土するが、東北地方で最も古い弥生土器のひとつである「青木畠式」の標式遺跡である（加藤他 1981）。さらに1.5kmさかのぼった左岸自然堤防上には、縄文時代晚期の巻堀遺跡、丘陵



第1図 山王囲遺跡周辺遺跡分布図

- 縄文時代晚期遺跡 ○ 弥生時代遺跡
- 丘陵地帯 ■ 段丘面 ■ 真坂面

にそって形成されている河岸段丘上には中・後期の宝領遺跡がある。巻堀遺跡は、縄文時代晚期から弥生時代初頭にかけて営まれた集落遺跡である。また、山王囲遺跡の西、北方の丘陵地帯にも多くの縄文時代、弥生時代の遺跡が分布している。

そして、この遺跡の南方では長崎川をへだてて洪積世段丘の第2築館面と第1築館面がゆるやかな起伏をもった台地を形成しており、上野、金矢、高田遺跡など縄文時代の遺跡が分布している。さらに、その丘陵地帯奥部には早期の赤坂遺跡、中期終末の大木10式土器を出土する日向、小古遺跡などをはじめとし、早期

から後期、晩期までの遺跡が分布している。また、松風西、松原遺跡、柳ノ目館では、弥生時代後期の天王山式期の資料が出土している。

この地域は、すでにふれたように、地形的に丘陵地帯と沖積地、河川などをとりこんでいるため、先史時代においても異なった生態系によって構成される豊かな自然環境を有したと推定される。実際に、この地域において、先史遺跡の分布は、比較的高い密度を示している。これは、比較的恵まれた環境にあって、先史時代各時期の集落が営まれた結果と考えられる。

山王周遺跡の周囲半径 5 km ほどの地域には鶴町、高田、青木畑、巻堀、上戸、清水田、上ノ原 C、猿田原、向芳沢といった晩期遺跡が 21 ケ所知られている。これらの遺跡群のなかでも、この山王周遺跡はとびぬけて規模の大きな集落遺跡である。この地域における晩期の基幹集落といってよいだろう。現在のところ、山王周遺跡に匹敵する規模と継続性をもつ晩期遺跡は、一迫川、迫川流域では知られていない。また、縄文時代の集落が、このような河川との比高の小さい低地に営まれ、その後背湿地に豊富な有機質の生活資材、生活残滓を遺存し、出土する遺跡も少ない。この遺跡は縄文時代の生活様式、生業活動、ひいては社会、文化を究明していく上できわめて重要な遺跡といえる。

3 遺跡の立地条件

山王周遺跡は、すでにふれたように長崎川との比高 3 m 程度の自然堤防の上にある。遺跡の主体は東西 240 m、南北 180 m 程度のひろがりをもつ微高地である。この微高地の南側で長崎川が大きく迂回して東流する。その北縁は、1 m 程の段差を形成しており、この段と一迫川との間の一級低い沖積地に水田がひろがる。一迫川は、500 m ほど北側を東へ流下する。

1965 年の調査では遺跡の北端東よりに調査区が設定された。その結果、かつての自然堤防の斜面から後背湿地にかけての地域が調査対象地となった。この付近一帯には、1976 年の範囲確認調査で、東西 140 m、南北 100 m ほどの広い範囲で厚い泥炭層が形成されていることが明らかにされた。

かつての自然堤防上、遺跡の東半部には遺物包含層が東西 100 m、南北 140 m 程の範囲にひろがっており、調査の時点でも上器、石器の散布がみられた。

この地域の南よりで、1948 年、1958 年に一迫町の元町長狩野文朝氏が調査を行っている。その際に、縄文時代前期大木 3 式期、後期、晩期大洞 B 式から A' 式期までの資料が出土している。また、堅穴住居跡と推定される遺構がこの自然堤防の中央部で検出されたという。出土資料の時期から、この遺跡の成立は、縄文時代前期の中葉までさかのぼると推定される。

さらに自然堤防の中央部東よりの地域で、1962 年に明治大学考古学研究室によって発掘調査が行われた。その結果、包含層や遺構から晩期中葉の大洞 C - 2 式、A 式期の豊富な資料がえられた。

このような従来の調査をあわせて考えると、縄文時代晩期に、この自然堤防の上の広い範囲に生活域、居住域が形成されていたことは確実である。この微高地を居住空間とし、その上、あるいは周辺

1. 山王門遺跡の概要

に遺物包含層を形成するような集落が晩期をつうじて存続したものと推定される。

この集落遺跡の北側の後背湿地には、木の葉、禾本科植物の茎、種子、木の幹、枝、根など植物の遺存体を包含した水成堆積のシルト、砂、有機物を多量に含んだ黒色粘土層が多数堆積し、厚さ 2 m に及んでいる。この厚く堆積した層には、多くの様々な遺物が包含されており、この遺跡は、いわゆる「泥炭遺跡」としての性格を有する。

そして、現在、この山上廻遺跡の一部は畠地、民家の敷地となっているが、その大部分が町立一迫小学校の敷地と神社境内であるため、全体的によくその景観を失わずに保存されている。

2. 発掘調査の概要

1 調査の経緯

この遺跡は、東北地方でも比較的早くから知られていた遺跡のひとつである。すでに1930年、土器、石器など縄文時代の遺物が出土することが登録、公表されている。そして、戦後、この地域の先史遺跡に強い関心をもって資料収集を行った狩野文朔氏によって、この遺跡はくりかえし踏査されたようである。氏の収集資料にこの遺跡の出土遺物がかなりの点数含まれている。狩野氏は、すでにふれたように、小規模ではあるが、この遺跡の南より、自然堤防の中央部分で発掘を行っている。さらに、この資料を調査した明治大学の杉原莊介氏が、晩期終末から弥生時代にかけての研究を目的とし、この遺跡の発掘調査を行っている(戸沢1967)。また、興野義一氏もこの地域の考古学的調査に没頭し、この遺跡に関心をもちつづけた。このような資料収集、いくつかの調査によって、山王開遺跡の重要性が次第に深く認識されるようになった。

1964年の秋、この遺跡の所在する一迫小学校敷地内に体育館が建設されることになり、そのボーリング調査が行われた。この地質調査のボーリング坑が、遺跡の泥炭層にあたり、その層から土器、獸骨が多数出土した。この事実を知った興野義一氏が一迫町と協力して同年12月、約一週間にわたってこの体育館建設予定地において発掘調査(第1次調査)を実施した(興野1969)。

この調査の結果、上層から伊東によって「大泉式」と命名された初期弥生土器が出土することが確認された。また、下層からは晩期後半の大洞A'式、A式、C-2式が出土し、縄文時代晩期後半のきわめて豊富な資料を包含していること、泥炭層が厚く堆積し、種々の有機質遺物が出土することが明らかとなった。この調査によって山王開遺跡の重要性があらためて確認され、この遺跡を組織的に調査することが必要と考えられるにいたった。興野氏は伊東と協議し、その本格的な調査を東北大学文学部考古学研究室にゆだねた。その結果、伊東はこの遺跡における発掘調査を指導することになった。

伊東は、翌年の1965年4月10日に、この遺跡の第2次調査にとりかかった。そして発掘区の東半部分を5月11日に調査完了し、翌5月12日から西半部分の調査に集中した。これを第3次調査とした。この第3次調査が終了したのは、同年6月10日である。調査総面積は、186m²、深さは、2.6mに達した。

調査は次の参加者によってすすめられた。

調査担当者 東北大学教授 伊東信雄(現東北大学名誉教授、東北学院大学教授)

調査参加者 東北大学助教授 芹沢長介(現東北大学名誉教授、東北福祉大学教授)

2. 発掘調査の概要

調査参加者	東北大文学部助手	伊藤 玄二 (現法政大学教授)
		桑原 滋郎 (現東北歴史資料館学芸部長)
	東北大大学院学生	林 謙作 (現北海道大学助教授)
		工藤 雅樹 (現宮城学院大学教授)
		小笠原 好彦 (現滋賀大学教授)
	東北大文学部学生	遠藤 勝博 (現岩手県立広田水産高校教諭)
		相原 康二 (現岩手県教育委員会文化財保護課係長)
		須藤 隆 (現東北大文学部助教授)
		松井 泉
		進藤 秋輝 (現宮城県多賀城跡調査研究所研究科長)
		藤沼 邦彦 (現宮城県教育委員会文化財保護課係長)
日本考古学協会会員		興野 義一

2 調査の目的

山王廻遺跡は、縄文時代晚期に営まれた集落遺跡である。東北地方の縄文時代晚期の文化は「亀ヶ岡文化」とよばれ、精巧な作りの土器、中空土偶、土製仮面、離頭銛などの骨角製漁撈具、狩猟具、骨、角、貝、粘土、木製の多種多様な装身具、石刀、石剣といった様々な石製品など、豊かな内容の物質文化を保持している。これらの多様な物質文化は、すぐれた技術にささえられており、その文化は高度に発達した狩猟・採集文化であるといえる。その文化内容は、早くから土器を中心に人々の関心をひきつけてきた。そして、多くの遺跡の調査によって、その多種多様な物質文化の内容が明らかにされてきた。この亀ヶ岡文化研究の流れは、日本考古学史において重要な位置をしめてきたといえる。ことに、その研究の中核となったのは、豊富に出土する装飾豊かな土器であった。

この亀ヶ岡文化の研究を体系的にすすめ、現在の研究の基礎を確立したのは、縄文原体とその施文方法をはじめて明らかにした山内清男である。山内は、岩手県大船渡市赤崎にある大洞貝塚の4つの地点を層位的に発掘した。そして、出土土器を分析し、土器型式による亀ヶ岡文化編年の基準を確定した。その土器型式は6期に区分された。この6期の編年が、今日、一般的に東北地方における晚期縄文文化の変遷をとらえる時間尺度として用いられている。

しかし、この先史文化の全体像については、なお、明らかにしなければならない多くの問題が山積している。例えば、この先史社会において土器、石器、骨角器などの生活資材がどのように生産されたのか、それらの用具はどのように使用されたのか、どの程度専徳的な作り手がいたのか、その製作技術はどのように集団内で維持、伝達されたのか、また、製品を作り出すために、資源はどのようなシステムで確保され、利用されたのか、その製品、あるいは技術は、集団間をどのようなルートで移

動し、広い地域に共通した物質文化の分布領域を形成したのか。このように、究明されなければならない問題は、枚挙にいとまがない。

この先史社会の生活様式、文化内容を可能なかぎり、総体的に明らかにすることと、それを支えた生業活動を把握することは、重要な課題である。この縄文時代の終末における東北地方の社会、文化、経済活動の理解を欠いては、おそらくその後のこの地域における弥生時代、古墳時代、さらに古代への発展の様態、その独自性を十分には理解できないといえる。

このように多くの事実が明らかにされ、物質文化の豊かさが指摘される亀ヶ岡文化ではあるが、なお、その文化・社会の構造については十分な理解がなされていない。その基本的な様態を捉えていくために、発掘調査によって集落や住居跡、墓域・墓制、様々な物質文化を生みだした技術についての質のよい資料を確保し、その分析を積み重ねていかなければならないといえる。

東北地方の縄文晩期における物質文化の内容把握を豊かなものにしているのは、亀ヶ岡、是川遺跡など泥炭遺跡から出土した膨大な資料の存在である。これらの遺跡の地下水位の高い堆積層には、通常の包含層では腐朽し、失われてしまう有機質の生活残渣が豊富に埋蔵されている。櫛、弓、斧柄、容器、丸木舟などの木製品、燃り紐、漆器、動物の毛皮など、その物質文化の内容は、これらの泥炭遺跡から出土する資料で一層多様化する。さらに、食用とされた植物、動物の遺存体などがよく保存されておりその生業活動を追究する上で貝塚と同様に、あるいはそれ以上に重要な情報源となる。

山王田遺跡は、1964年12月に興野義一氏が行った第1次調査によって、きわめて規模の大きい泥炭遺跡であり、豊富な縄文時代晩期後半の資料を包含していることが明らかにされた。この泥炭遺跡を層位的に丹念に発掘することによって晩期後半の土器型式の推移を追求できるだけではなく、それにともなう豊かな物質文化の内容と、それを生みだした技術の推移を明らかにしていくことが可能であると考えられた。今回の調査では、東北地方における晩期縄文文化、それを支えた狩猟・採集活動の内容を明らかにするための手がかりをうることが調査の主要な目的となった。

また、この遺跡において、第1次調査によって、弥生時代の包含層が泥炭層の上にひろがっていることが確認されており、この初期弥生土器と、これにともなう他の物質文化の内容を明らかにすることが、この調査のもう一つの重要な目的となった。

この初期弥生土器は、登米郡中田町大沼大泉に所在する大泉遺跡出土資料を標準とする「大泉式」と命名された土器型式に属する。この土器型式の内容は、これまでに出土した資料がきわめて少量であったため、十分に把握されていなかった。また、その編年上の位置は、東北地方の弥生時代初頭に位置づけられていたが、この時期にこの地域で農耕が行われた確実な証拠はえられていなかった。

東北地方において稲作を基軸とする農耕社会がどのように、いつ頃成立したのか、先行する晩期縄文時代の狩猟・採集社会からどのような発展の過程をへて、農耕社会が形成されたのか、弥生時代初頭の大泉式期にどのような農耕が行われたのか、また、その文化内容は、西日本の弥生文化、そして

2. 発掘調査の概要

晩期終末の縄文文化とどのような点で共通性、異質性を有するのか、この時期の文化、社会、経済活動については、究明しなければならない多くの課題が存在する。

このように、山王岡遺跡は、東北地方の農耕社会、弥生文化の成立の問題に関して、重要な資料を提供することが十分に予想された。そのため、この遺跡において慎重な調査が行われることが是非とも必要であると考えられるにいたった。

3 調査方法

貝塚の調査と同様に、丹念な層位の発掘が調査の基本である。是川、亀ヶ岡遺跡などでこれまでに行われた発掘によって「泥炭遺跡」の調査がもたらす成果がきわめて大きいものであることは、十分に予想された。ことに動物遺存体、植物質の遺物をどのように調査するかが大きな課題となった。

調査にあたり、第一次調査の発掘区をとりこみ、西北—東南($N 64^{\circ}W$)の方位に長さ16m、幅12mの調査区が設定された。そして、この調査区を $3 \times 3\text{m}$ のグリッドで4段6列に仕切り(第3図4)、西南隅から東北方に順次A、B、C、……、と呼称し、24グリッドにAからXの地区名をあえた。

そして、A区からL区までの15区画を東区、M区からX区までの12区画を西区とした。東区は、南北12m、東西8.5mの発掘区、西区は、南北12m、東西7mの発掘区となった。調査期間の前半は、東区を主として調査し、これが完了した後、調査期間の後半に西区の調査を行った。

出土遺物については、土器・土製品、石器、装身具、骨角器、木製品についてそれぞれすべて出土層位の記録と、レベル測定、平板測量による出土位置の記録を行った。遺物番号は、原則として土器・土製品にP、石器にS、装身具にO、骨角器にB、木製品にWの記号をあたえた。

調査の前半、西区では、層位に順次通し番号をあたえた。しかし、この層名は、下層にすすむにしたがってきわめて繁雑となり、遺物のとりあげに支障をきたした。そのため、西区の調査では、上器型式の変化を考慮に入れ、I、II、III…と層位の大別名をあたえ、その中の各堆積層をa、b、c…とアルファベットで区分し、IIIa、IIIc、IVa…といった呼称をあたえた。

分析研究が様々に試みられ、資料整理がすすんだ現在では、この調査方法について多くの反省しなければならない問題が顕在化している。この調査にあたって、植物の種子、木の葉、自然木、獸皮、動物遺存体など検出した資料については、可能な限り、丹念に採取する努力をはらった。しかし、その資料採取に一貫したとりくみ方法は計画されなかった。そのため、確保された資料に著しいかたよりが生じたことは否定できない。

梅雨時をさけ、終始排水に努めたが、下層の泥炭層では、湧水になやまされ、作業は、難行した。東区では、西壁を実測中に2.6mの壁面が崩壊し、この部分の図面は、作成不能となった。他の面については、いずれも記録をとることができた。

4 層序関係

東 区 1層から26層まで細分した。7層(黒褐色土)からは、「山王Ⅲ層式」期の土器、石器が出土している。9層(黒褐色土)は、大洞A'式期の資料を包含している。10層(黒色土)、11a, 11b, 12, 13, 14層からは、大洞A式期の資料が出土した。11a層から黒色、灰色の粘質土、砂質土が互層をなし、湿地帯での堆積層となり、下層にすすむにしたがって植物質を多量に含むようになり、泥炭化する。15a層以下は、大洞C-2式期の上器、石器、骨角器、土製品など多様な資料が出土している。朱漆塗り櫛、腕輪、籠胎漆器は、14層以下で出土し、25層まで出土した。I区の25層から2片の編布断片が出土した。また、18層以下では、クルミなど植物の果皮、自然木、葉、茎、獸骨、魚骨などが顕著になる。釣針、鈎頭、垂飾などの骨角器も出土している。動物遺存体もよく採集されているが、ニホンジカ、イノシシの骨が目についた。

西 区 耕作土(I層)、水田の床土(II層)をのぞき、III層からVIIc層まで40枚をこす包含層が調査された。表土層下50cm程度でIII層に達する。このIII層は、a, b, c, c-2, k, l, m, nの8層からなる。上層のIIIa, b, c, c-2, k層は、黒褐色砂質土で、下層のl, n層は、灰色の粘質土で、鉄分が多く沈着し、沼鉄を顕著に含んでいる。n層は厚さ30cm程度あるが、ほとんど遺物を包含していない。m層は、この粘土層の中間にひろがる黒色土層である。

III n層以外の7枚の層から、「大泉式」とよばれてきた初期弥生土器が多量に出土した。出土資料の分析を行った結果、この上器群に、「山王Ⅲ層式」という土器型式が設定された(須藤1983)。

IV層は、北半では、炭化物の多い黒色砂質土(a層)がひろがり、南半において、炭化物のまじる黒灰色粘質土(k層)がひろがる。この下層にl, m, nの3枚の層が堆積している。これらの層は、灰色砂質土と黒灰褐色土との互層である。遺物は、厚さ5~20cmのa, k層と、I層の中間、そしてm層の上面から多量に出土している。これらの土器群は、大洞A'式に属する。

V層は、厚さ40~50cmある。この層は、a, b, b-1, b-2, b-3, b-4, b-5, c, c-1, c-2, c-3, c-4, c-7, k, l, m, n層の17枚の層に細分されている。このうち、b層からc-7層までは、黄灰色粘質土層で、下層にすすむにしたがって、獸骨や植物遺存体の包含量が顕著となる。そして、土製の玉類、耳飾りや朱漆塗りの櫛、籠胎漆器など有機質の資料が多量に出土する。とくに、Vc層の遺物出土量は卓越している。出土する土器は、大洞A式に属する。

VI層は、東壁では、厚さ60~80cmある。西壁では、層の厚さは、20cm程度で、自然堤防から湿地にすすむにしたがってうすくなる。この層は、灰白色ないし黄灰色の粘質土で、クルミなどを含んだ黒色有機質土、獸骨、魚骨を含んだ茶褐色土層などと複雑に互層を形成する。このVI層では、a, b, c, d, e, f, g, h層など8枚をこす層が識別された。この層からは土器とともに、籠胎漆器、櫛、腕輪、鹿角製垂飾など多種多様な遺物が出土した。土器は、工字文を主要なモチーフとしている。

2. 発掘調査の概要

VII層は、東壁で厚さ20～35cm、西壁で10～20cm程度の層である。a, bの2層に区分された。VIIa層は、獸骨、クルミ、自然木を包含する黄灰褐色の粘質土で、残存率のよい上器が出土している。この上器群は、大洞C-2式に属する。VIIb層は、灰褐色粘質上で遺物の出土量は著しく減少する。VII層の下層には黒灰色の粘質土層がひろがる。この層以下は無遺物層である。

5 出 土 資 料

検出遺構

検出された遺構としては、東区のⅢ層において山王Ⅲ層式上器の甕と深鉢の合せ口土器が埋設されていた。土塗の掘り方が確認されている。この埋設土器は、東北地方の縄文時代晚期後半にしばしばみられる小児甕棺に属すると考えられる。

西区では、IVk, b層の上面で地床炉が2基、石囲炉が1基、また径2.2m、深さ40cmほどの土塗1基が検出されている。しかし、柱穴、壁、周溝など堅穴住居の痕跡は検出されなかった。IVl層上面では、石を組んだピットが8基検出されている。M区第1号遺構は立石をともなっていた。これに接して大洞A'式の高杯が出土している。Q区の6号石組遺構は、径50cm、深さ40cmほどのピットで底面まで石を配している。V区西壁で4号石組遺構が検出されている(第22, 23図版)。

P区のIVl層で合せ口甕棺が深さ30cmほどの土塗に埋設されていた。土器内面に朱が認められた。このIVl層の上面からは、上器とともに、石皿6、凹石29、「円盤状石製品」4、石鏃、石核など石器の出土がめだち、生活面と推定された。しかし、住居跡は確認されなかった。

O、P区東壁より長径3m、幅2m程度の石囲遺構がIVn層をとりのぞいた下、V層上面から検出されている(第28図版)。この遺構には朱が一面に散布しており、トチの実などの種子が一括出土している。底面からは礫が多数出土している。また、独鉛石が1点この礫群から出土した。

出 土 遺 物

出土した遺物は、多種多様で膨大な量に達した。その整理は、現在なお進行中である。ここでは、発掘の時点で記録にとどめた資料の内容について記述しておく。

土 器 391点が登録されており、東区で152点、西区で239点出土している。東区では山王Ⅲ層式3点、大洞A'式2点、11層から14層で大洞A式土器45点、15層から26層で大洞C-2式が112点出土している。西区では、Ⅲ層から117点、IV層で大洞A'式55点、V層で大洞A式21点、VI層で34点、VII層で大洞C-2式12点が記録されている。この土器の出土傾向から、晚期最終末から弥生時代初頭の生活域が西区にあり、晚期後半の大洞C-2式期、A式期の包含層は、自然堤防の斜面にひろがり、C-2式は東区に、A式は西区の下層に厚く堆積していることが指摘される。このような厚い堆積層の形成から、それぞれの土器型式の傾向性、型式推移を詳細に検討することが可能である。これらの資料のうち、Vc-7層から出土した広口壺は、工字文構成の横円文が体部全面に



1



4



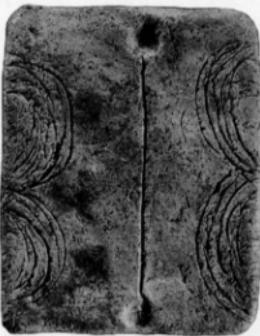
2



5



3



6

第2図 山王園遺跡出土遺物 1 壺（V層），2 広口壺（VI層），
3 岩版（VI層），4 鹿角製垂飾（VI層），5 櫛，6 土版（VI層）

2. 発掘調査の概要



第3図 山王園遺跡出土浮線渦巻文土器

展開する土器である。この型式の土器は、西志賀貝塚の最下層から出土しており、東海地方の晩期終末、弥生前期の土器型式と、大洞A式との併行関係を決定する上で重要な資料である(第3図)。

発掘調査の過程で、いくつかの事実が指摘された。すなわち、A'式と「大泉式」とが厚い無遺物層(Ⅲn層)によって明確に分離される。IV層の大洞A'式に上層と下層で型式差が存在する。西区のVI層、V層から出土した「大洞A式」の内容にはかなり様相の違いが認められる。このような土器型式のあり方に關しては、今後、資料報告において一つ一つの文化層について詳述する予定である。

石 器 出土した石器は、総数938点、東区で293点、10層から14層で61点、15層から24層で232点、西区で645点、III層で179点、IV層で105点、V層で172点、VI層で148点、VII層で41点が出土している。石鎌390点、石匙18点、石錐24点、スクレイバー22点、円盤状石器228点、石斧35点、石剣・石刀36点、石棒6点、独鈷石2点、石皿28点、凹石116点など、その内容はきわめて豊富である。石錐は、III層が最も多量に出土し、円盤状石器はVI、VII層で多量に出土した。III層では皆無である。凹石、石皿はV、IV層に多い。石核、剥片はほとんど登録されていない。

装身具、籠胎漆器、その他 土製の玉類864点、耳飾56点、ヒスイ製・石製玉類7点、腕輪13点、櫛45点、籠胎漆器36点、骨角器44点、岩版5点、土版6点、土偶23点、猪牙製垂飾、編布、カラス貝に朱漆をかけたもの(24層)、匙状木製品(25層)、用途不明の加工木、自然木、獸皮、ドングリ、クルミなどの種子類、シカ、イノシシなどの獸骨も豊富に出土している。シカ、イノシシはかなり大型である点が特徴的である。豊かな動物資源によってその生業がささえられていたと考えられる。

土製玉類は、西区ではVa層から出現し、Vc-1, c-7, VI層で多量に出土している。耳飾についても同様な傾向が認められる。櫛は、Vb-4層から出現し、Vc-7, VIg層で多数出土した。

籠胎漆器は、東区では14層から25層にかけて出土し、西区ではVc-1層からⅢb層で出土している。18層、VIb層出土量がそれぞれ6点で最も多い。編布の断片は、いずれも25層から出土している。

骨角器の出土量は少ないが、組合式鉛頭、結合釣針、鹿角製垂飾などがみられる。

3. 調査の意義

山王岡遺跡における2ヶ月にわたる発掘調査によって東北地方における縄文時代晩期から弥生時代にかけての豊かな内容の資料がえられた。亀ヶ岡、是川遺跡、沼津貝塚などで從来出土している籃胎漆器、骨角器、木製品などの資料によって、この時期にすぐれた様々な物質文化をささえる技術体系が確立していたことが知られていたが、今回の調査で、これらの生活資材の内容をより一層明確にすることのできる資料を多数確保することができた。

ことに、編布の検出は縄文時代における着衣類などの素材となる布の製作技術を明確にできた点できわめて大きな成果であった(伊東1966)。

また、櫛、籃胎漆器などの漆製品の検出によって、この時期に塗りの技術がきわめて高度に発達し、多種多様な製品を生み出していたことを明らかにすることができた。

このようなきわめて貴重な資料とともに、多量の土器、石器が出土し、この時期の土器作り、その機能、それをもたらした生活様式について、そのあり方を分析するうえできわめて有効な資料がえられた。とくに厚く堆積した40層に及ぶ包含層から層位的に多量の資料が採取されており、これらの資料群を分析、検討することによって、従来の晩期縄文土器の型式学研究、あるいは石器組成の理解をより一層深めていくことができると考えられる。

20年を経た現在、この調査は、すでに指摘したように、植物質資料、動物遺存体の採取方法が十分に検討されていなかった点にうかがえるように、泥炭遺跡の調査としては不十分さが感ぜられる。しかし、1960年代の段階での調査としては、その調査内容は、きわめて精緻である。その記録もわずか10人程度の調査員構成としてはきわめてきめ細かくなされている。この調査成果の全体をできる限りきめ細かく公表することが必要といえる。

Ⅲ層出土資料によって、山王Ⅲ層式土器が設定された。この土器型式は、東北地方中部、太平洋側

の初期弥生土器に位置づけられた。その装飾方法は、晩期縄文土器の技術をよく踏襲している。しかし、その器種構成に、蓋と甕のセット関係が出現、定着している点などにうかがえるよう、すでにこの土器型式



第4図 山王岡遺跡出土編布断片

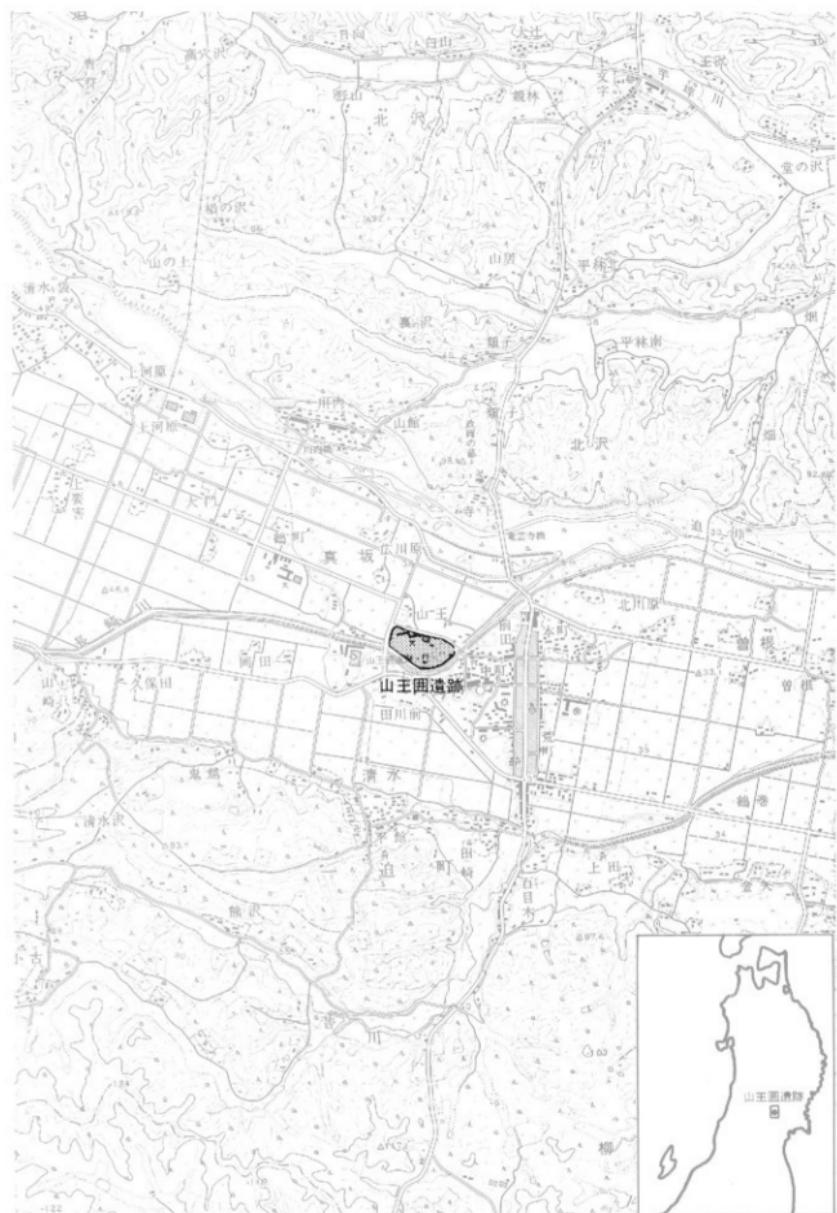


図1 山王囲遺跡位置図(1:25,000)

3. 調査の意義

は、この地方の弥生土器の基本的な構成を確立している。一方、これにともなう石器には4点の石劍、121点の石鎚にみられるように、縄文時代晚期の石器のあり方と大きな差異は認められない。しかし、石包丁と推定される石器が第一次調査の段階で興野氏によって採集されている(興野1966, 須藤1983)。この石包丁の存在で、この遺跡において山王Ⅲ式期に農耕が営まれた可能性がきわめて高いこととなる。今後、この包含層の土壤について、プラント・オバールの分析などを行うことによって稲作農耕の存在を確実に立証することが是非必要である。

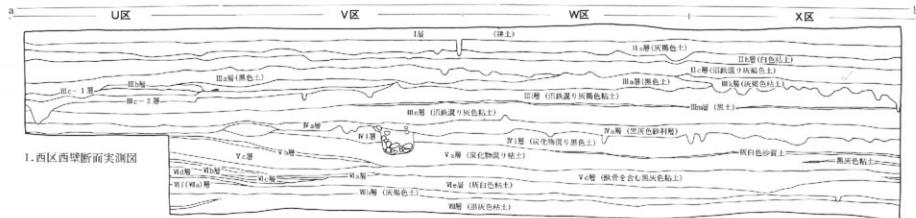
このように、山王廻遺跡の調査によって東北地方の狩猟・採集社会の物質文化、それをもたらした技術、生業活動のあり方、そして、この地方の初期農耕社会における物質文化の内容が、一段と明確になった。その結果、東北地方における狩猟・採集社会から農耕社会への変革期、過渡期の研究が一段と推進されたといえる。

引用文献

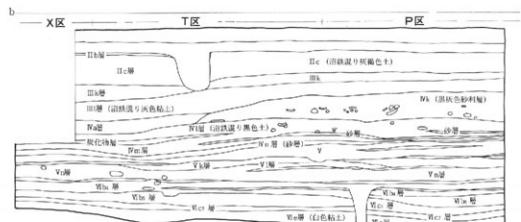
- 阿子島功 1966 追川沿岸の地形 東北地理 18 pp. 123-132
一迫町教育委員会 1984 一迫町史
伊東信雄 1966 縄文時代の布 文化 30-1 pp. 1-20
伊東信雄 1970 宮城県一迫町山王遺跡 日本考古学年報 18 pp. 80, 81
加藤道男 1982 青木畑遺跡 宮城県文化財調査報告書 85
興野義一 1969 宮城県栗原郡山王遺跡 日本考古学年報 17 p. 80
須藤 降 1983 東北地方の初期弥生土器 考古学雑誌 68-3 pp. 1-63
芹沢長介他 1976 史跡山王廻遺跡保存管理計画書
戸沢充則 1967 宮城県栗原郡山王遺跡 日本考古学年報 15 pp. 90, 91



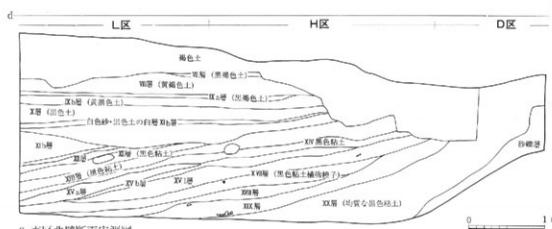
図2 山王園遺跡地形図



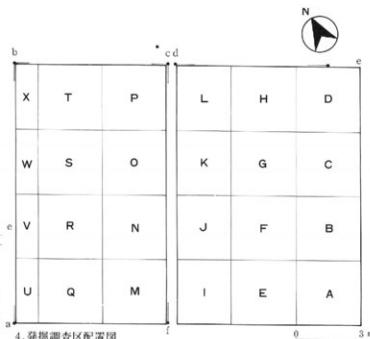
1. 西区西壁断面実測図



2. 北区北壁断面実測図



3. 東区北壁断面実測図



4. 発掘調査区配置図

図 3 山王園遺跡発掘調査区配置図及び断面実測図

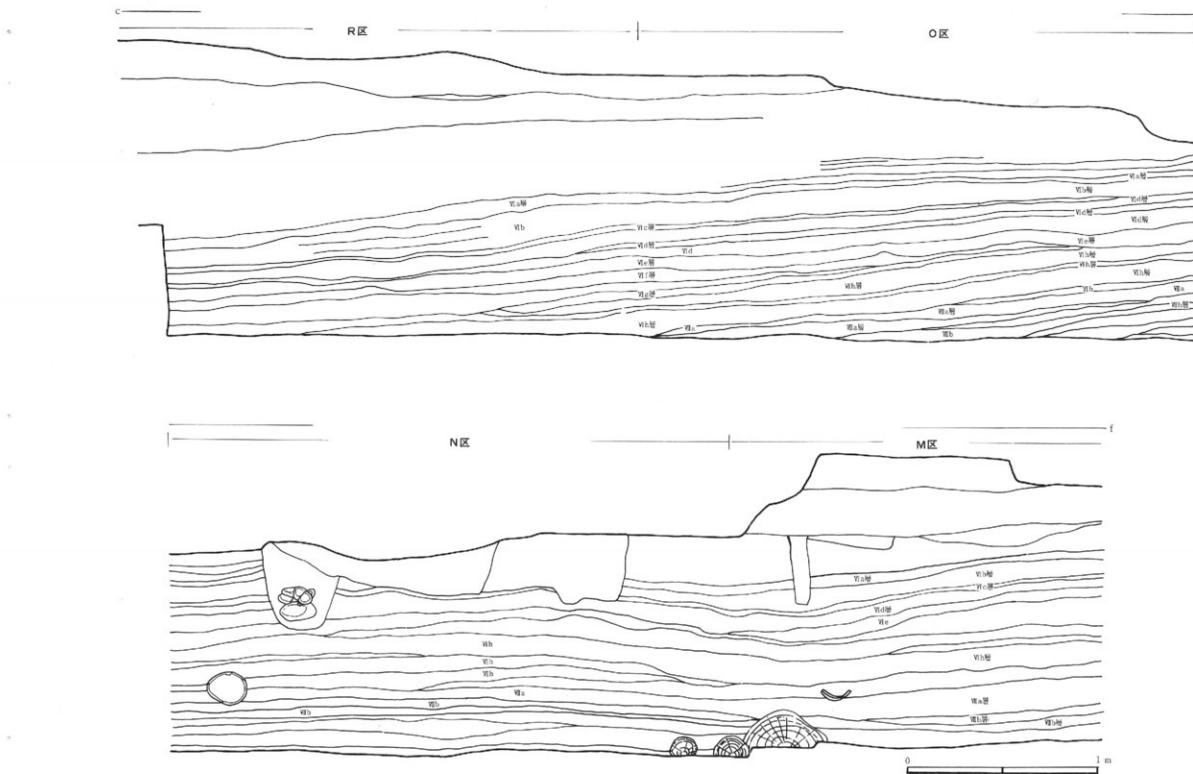


図4 山王圓遺跡西区東壁断面実測図

原色図版



1. 山王城遺跡とその周辺の航
空写真



2. 山王城遺跡とその周辺の航
空写真
(東から)

図 版 2



1. 山王町跡発掘区近景

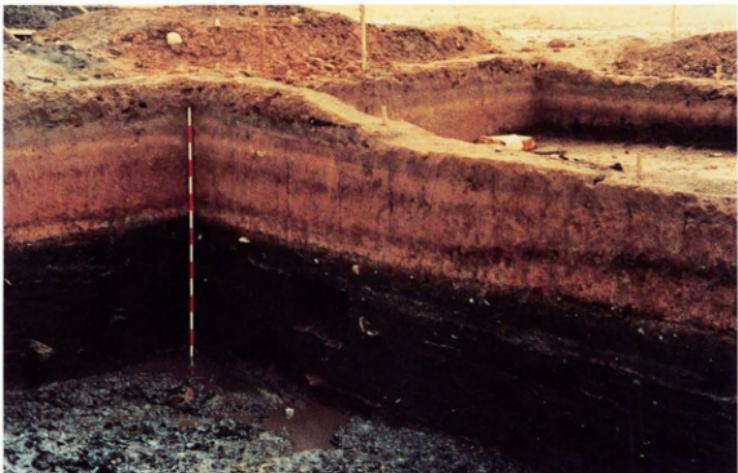
(西から)



2. 西区調査区の状況 (南から)



3. 西区調査区の状況 (西から)



1. 東区(I-K区)の西壁断面



2. 西区(U-W区)の西壁断面



3. 西区T区IVa層上面の石圓

炉

(西から)

1. K区XⅤ层出土彩文蓝胎漆器



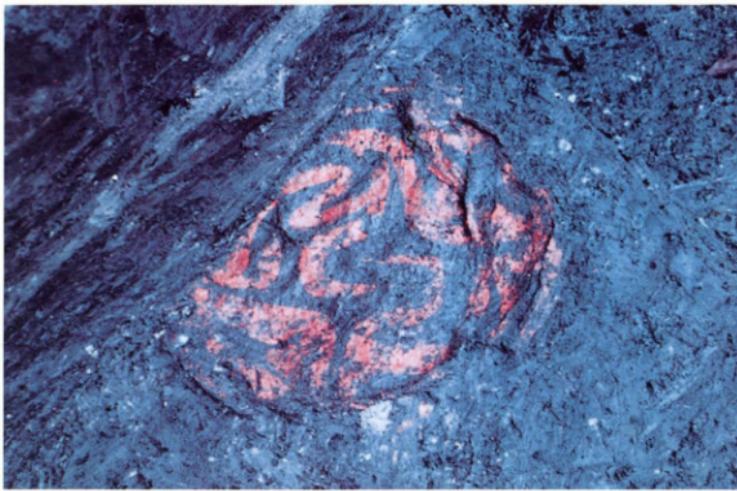
2. R区VIb层出土彩文蓝胎漆器



3. VI层出土彩文蓝胎漆器



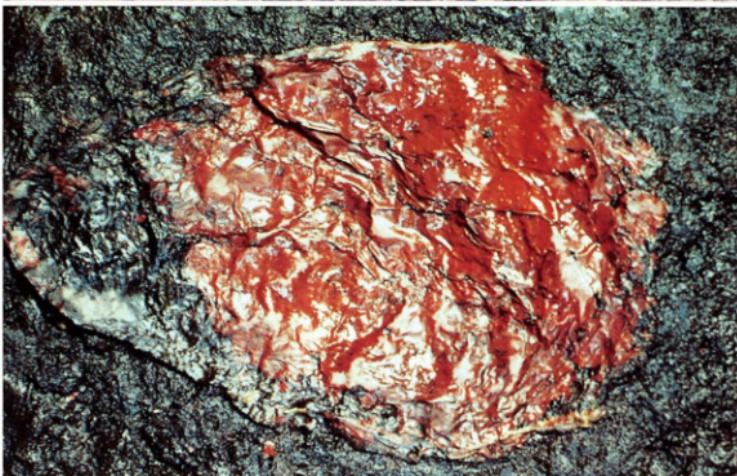
1. I区 XIV層出土彩文藍胎漆器



2. O区 Vc層出土彩文藍胎漆器



3. VI層出土朱漆塗り貝製品



1. E区出土藍胎漆器



2. K区XVII層出土藍胎漆器



3. 彩文藍胎漆器断片出土状態



1. E区 XXIII 層出土黒・朱漆
塗り貝製品



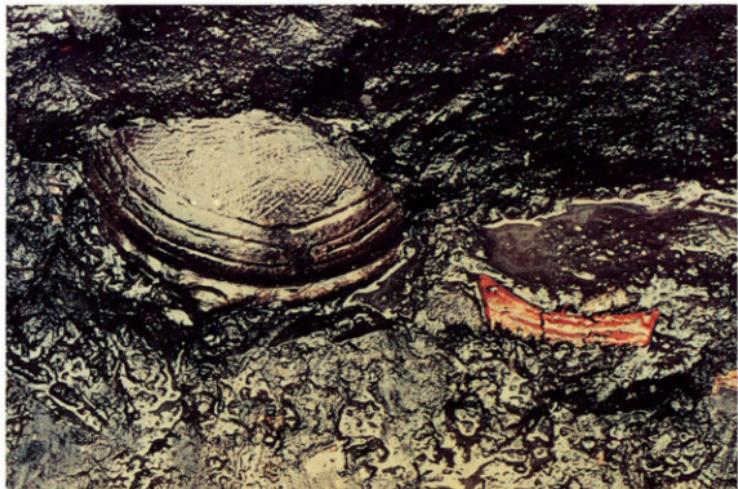
2. 彩文籠胎漆器の出土状態



3. H区 XX層朱塗り櫛の出土状
態



1. M区XXa層朱塗り櫛の出土
状態



2. 朱漆塗り櫛出土状態



3. E区XXIII層朱漆塗り製品
の出土状態



1. I区XXV層編布出土状態



2. 編 布



3. E区XXV層朱塗り紐出土状態



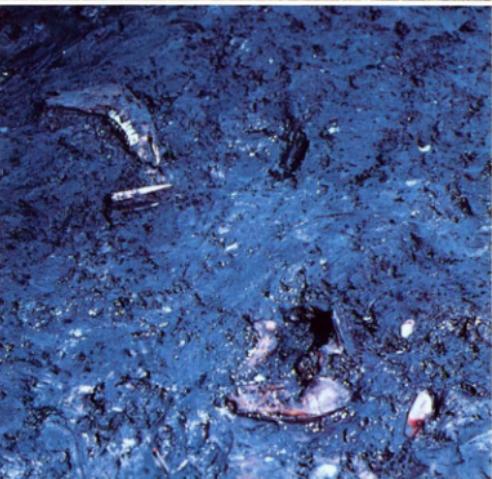
1. 朱塗り紐の出土状態



2. J区XIII層種子類出土状態



3. P区V層獸骨出土状態



1. G 区 XX 層遺物出土状態



2. H, L 区 XXV 層遺物出土状態



3. 発掘調査の状況



写 真 図 版

第1図版
遺跡遠景



1. 山王町遺跡全景（南から）



2. 発掘調査地区遠景（西から）



3. 発掘調査区全景（西から）

第2図版
東区壁面



1. I, J区南・西壁断面



2. I, J区西壁断面



3. D, H, L区北壁断面

第3図版
東区山王Ⅲ層式期埋め甕

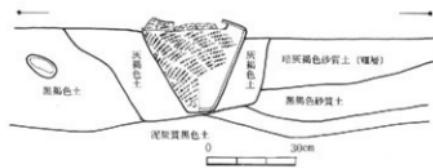
1. E区Ⅲ層における埋め甕
(山王Ⅲ層式)検出状態



2. E区Ⅲ層における埋め甕
(山王Ⅲ層式)検出状態



3. E区Ⅲ層埋め甕実測図



4. E区Ⅲ層埋め甕の埋設状態



第4図版
東区土器出土状態



1. R区Ⅲa層における大泉式
土器(深鉢)出土状態



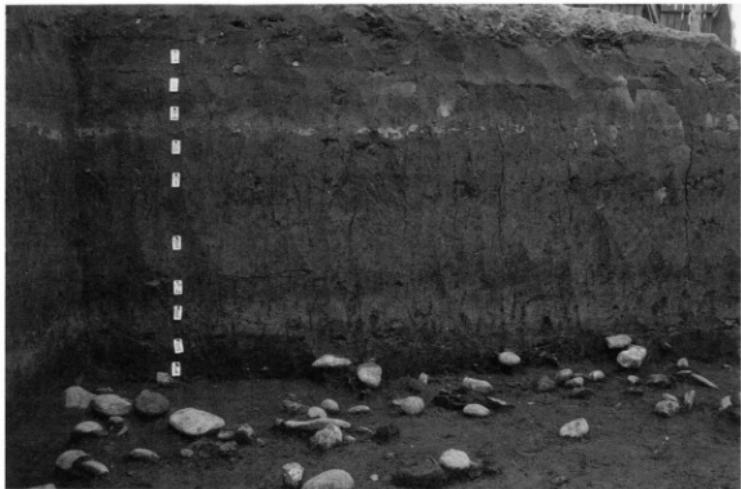
2. H区大洞A'式高杯出土状態
(P-31)



3. L区XII層における大洞A式
深鉢形土器の出土状態

第5図版
東区遺物出土状態

1. H区X層(大窓A式等)中の
鍬群検出状態、およびH-
K区西壁断面



2. K, L区XV層検出状態(大
窓C₂式と大窓A式の中間的様
相の土器が出土している)



3. K, L区XV層の遺物出土
状態



第6図版
東区遺物出土状態

1. K, L区XV層遺物出土状態



2. D区大洞C₂式壺形土器出土状態



3. J, K区XV層における遺物出土状態



第7図版
東区遺物出土状態

1. B区大洞C₂式粗製壺(P-184), 浅鉢(P-187), 精製壺(P-186)出土状態



2. B区大洞C₂式浅鉢(P-187), 精製壺(P-186)出土状態



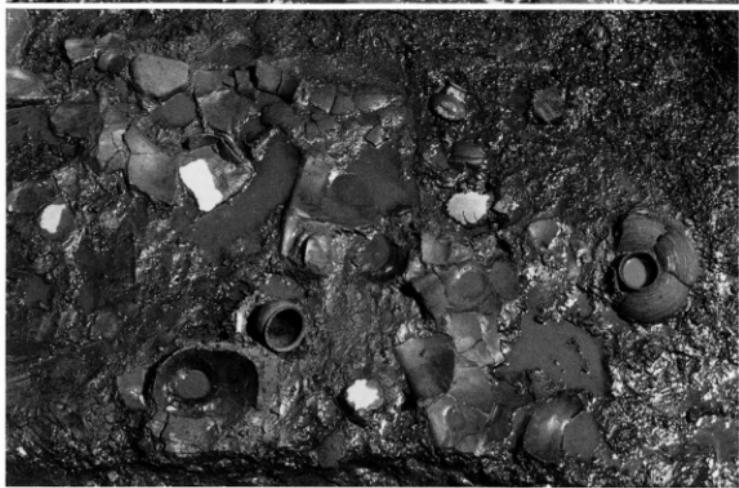
3. H区XV番注口土器(P-189)出土状態



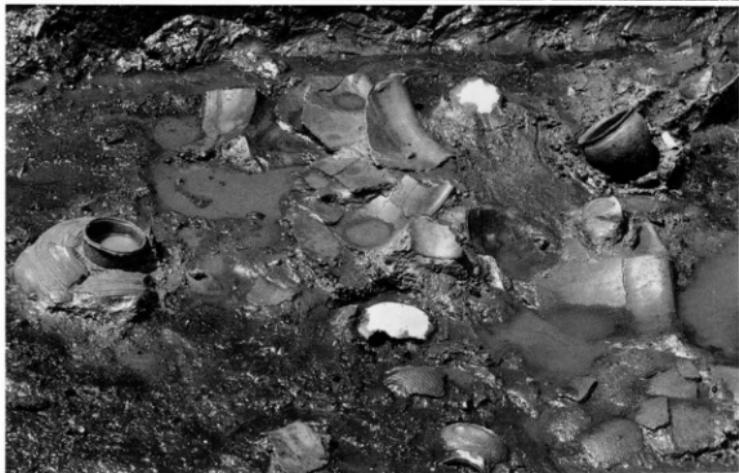
第8図版
東区遺物出土状態



1. G区XX層朱塗り壺（P-246）、深鉢形土器出土状態



2. J区XXV層遺物出土状態



3. J区XXV層遺物出土状態

1. F区XXV層石刀(S-512)
土器出土状態



2. E区XXI層石棒(S-340)出土
状態



3. K区X層における玉類出土
状態



第10図版
東区遺物出土状態

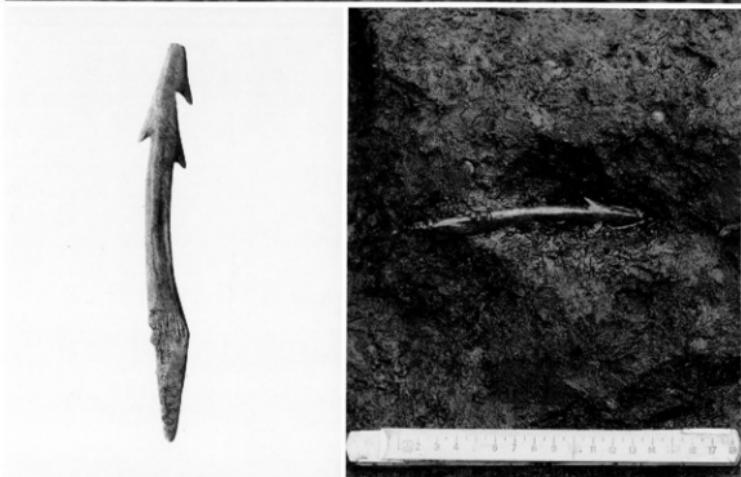
1. K区XIII層骨針出土状態
(B-8)



2. L区XX層結合式釣針(B-41)出土状態



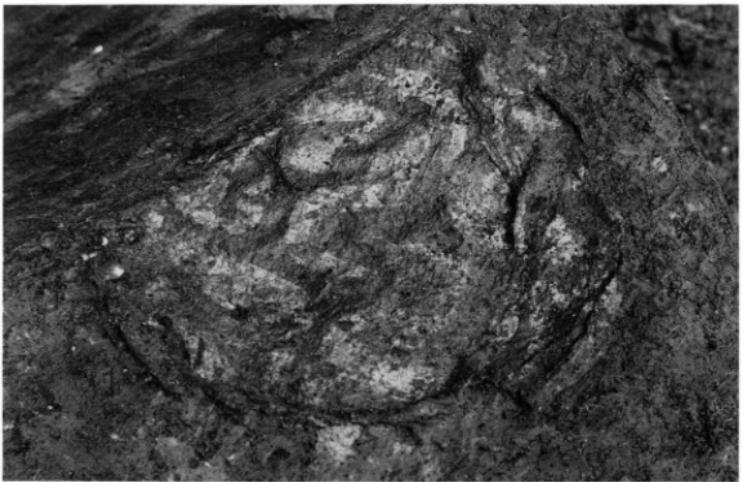
3. 鹿角製組合せ式鈎頭
(B-9)(左)



4. H区XVI層鹿角製組合せ式
鈎頭(B-9)出土状態(右)

第11図版
東区藍胎漆器出土状態

1. I区 XIV層藍胎漆器(0-41)
出土状態



2. K区 XV層彩文藍胎漆器(0-37)
出土状態



3. K区 XIX層藍胎漆器(0-46)
出土状態



第12回版
東区藍胎漆器出土状態

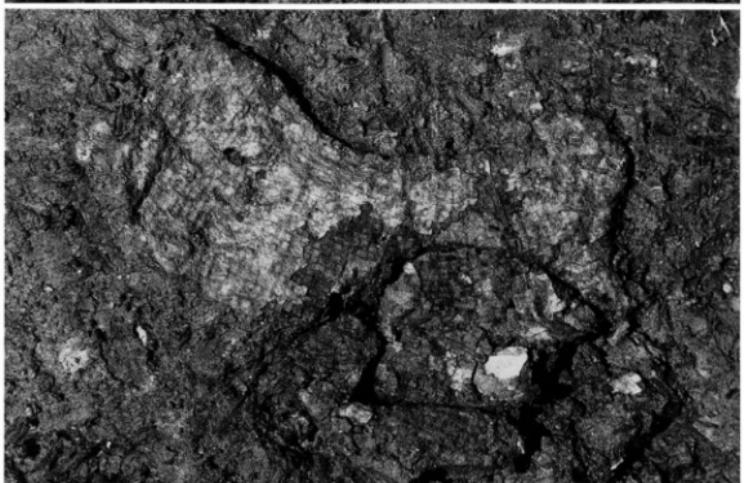
1. K区 XVII層藍胎漆器出土状態

(O-67)



2. E区 XXV層藍胎漆器

(O-99)

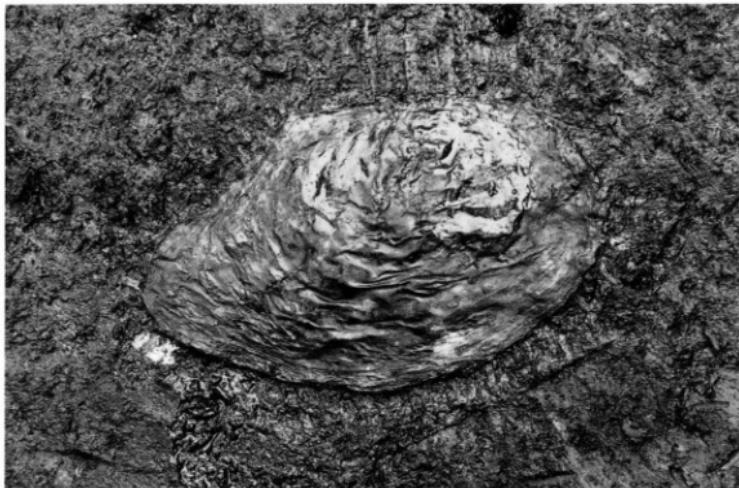


3. E区藍胎漆器出土状態



第13図版
東区遺物出土状態

1. E区XXIII層朱・黒漆塗り貝
(O-81) 出土状態



2. I区XVI層朱塗り櫛(O-38)
出土状態



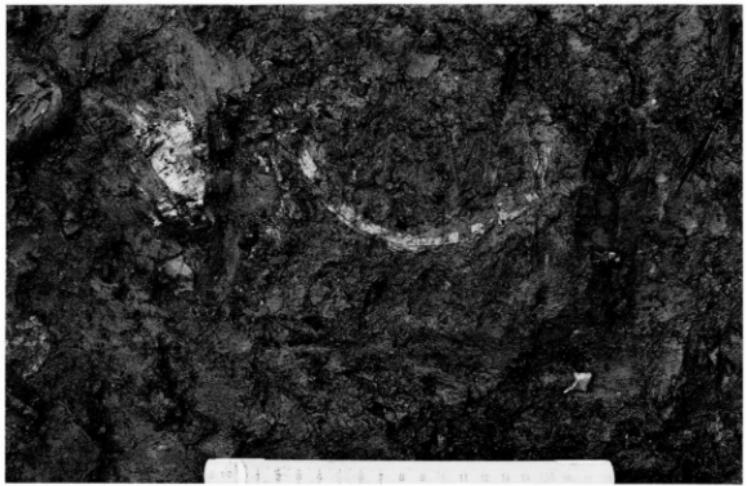
3. II区XVI層朱漆塗り櫛(O-
57) 出土状態



第14図版
東区遺物出土状態

1. E区XXIII層藍胎漆器出土状態

(O-74)



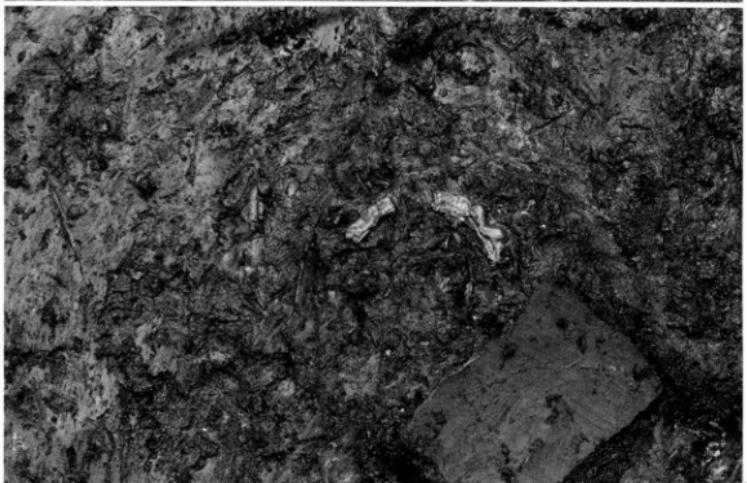
2. K区XV層における朱塗り腕輪出土状態

(O-32)



3. I区XXV層出土朱塗り腕輪

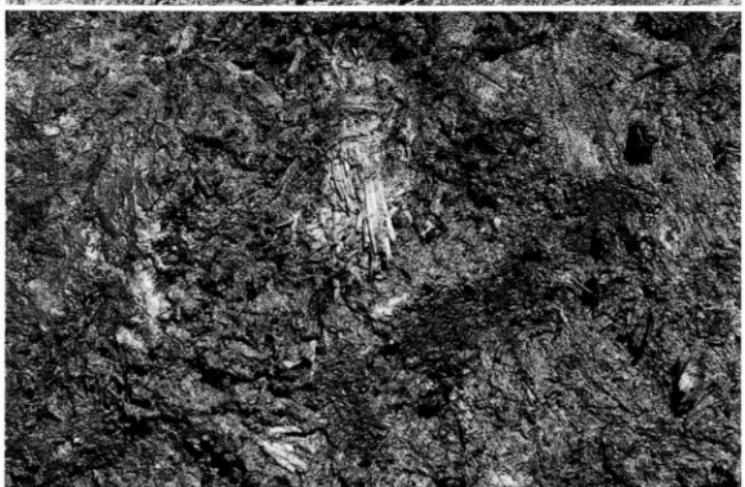
(O-83)



1. I区XXV層編布(O-97)出土状態



2. I区XXIII層朱塗り紐状製品
(O-77)



3. E区XXV層朱塗り紐状製品
(左)



4. E区XXV層朱塗り紐状製品
(O-94), 石鐵(S-474)出土
状態 (右)

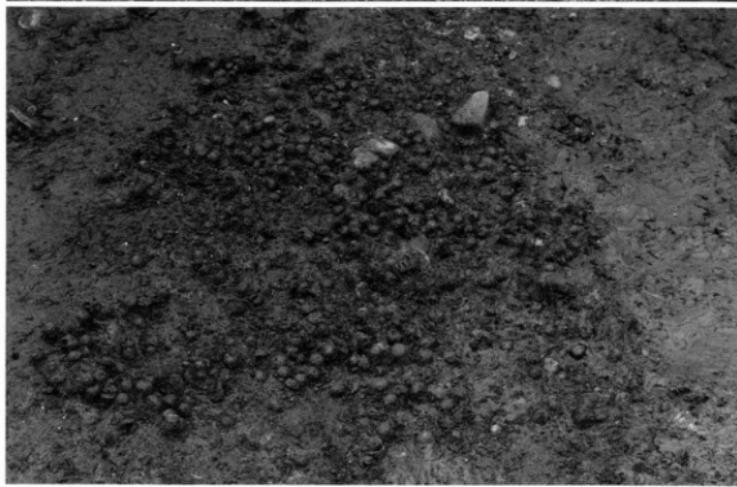


第16図版
東区遺物出土状態

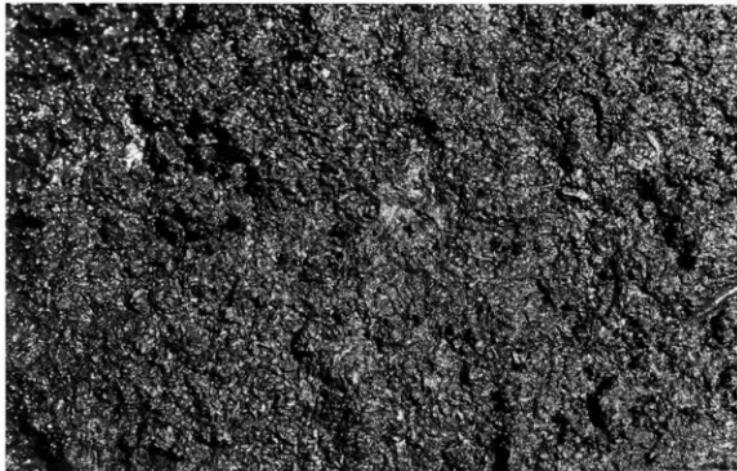
1. H, L区XXV層土器、自然
木の検出状態



2. L区X層におけるドングリ
の出土状態(長径1m、厚さ
3cm程のひろがりをもつ。鹿
の角、歯骨がドングリの下か
ら出土した。土塊は検出され
なかった。)



3. J区XXIII層種子類出土状態



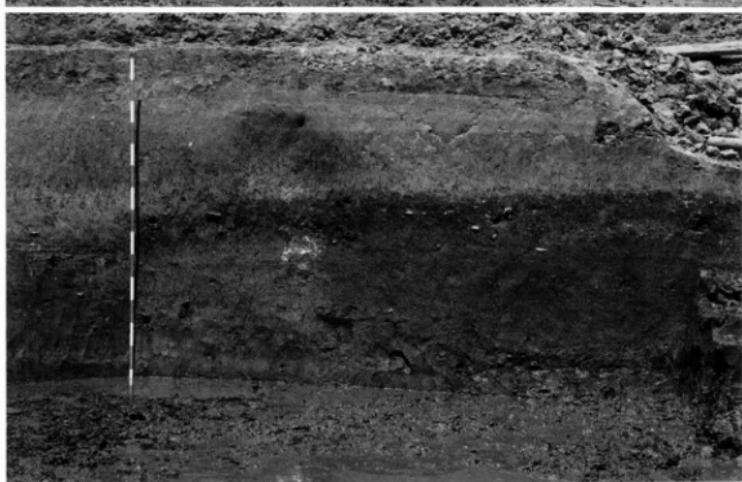
第17図版
西区壁面



1. 西区(M~W区)西壁断面



2. 西区(M~W区)西壁断面



3. 西区(P, T区)西壁断面で
の土層堆積状態

第18図版
西区遺物出土状態



1. Q, U区Ⅲk層における遺物出土状態
(西から)



2. W区Ⅲc層山王Ⅲ層式高杯
(P-270)出土状態

1. T区Ⅲk層泥生土器(壺)出土
状態



2. N区Ⅲm層浅縁出土状態
(P-267)



3. Q区Ⅲm層石刀出土状態
(S-543)



第20回版
西区遺構検出状況

1. O, R, M, N区IVa層上面
土爐(No.7)検出状況



2. M, N, Q, R区IVk層上面
遺構検出状態 (北から)

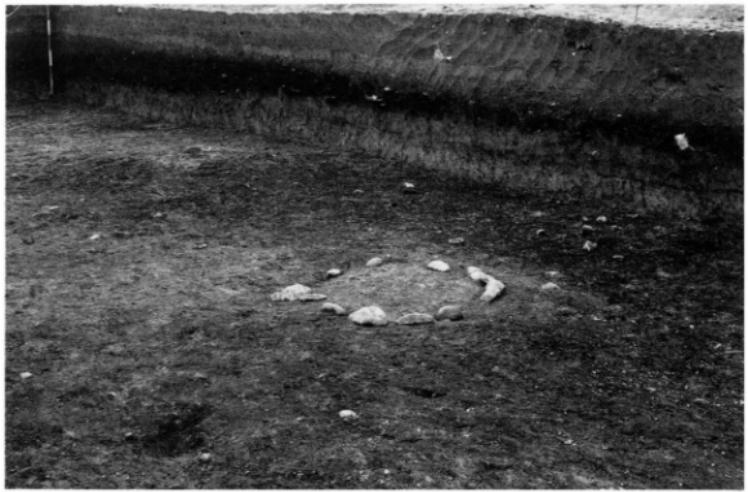


3. M, N, O, R区IVa層上面
土爐(No.7)検出状態



第21図版
西区炉跡

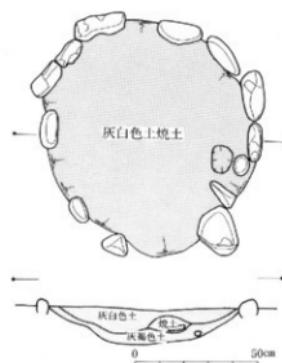
1. T区IVa層上面石圓炉跡の
検出状態



2. T区IVa層上面石圓炉の検
出状態



3. T区IVa層上面石圓炉実測
図 (左)

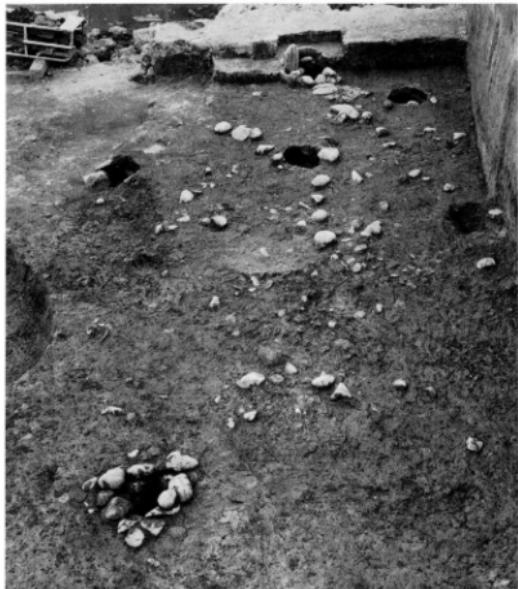


4. T区IVa層上面石圓炉
(燒土をとりのぞいた状態) (右)



第22図版
西区石組み遺構

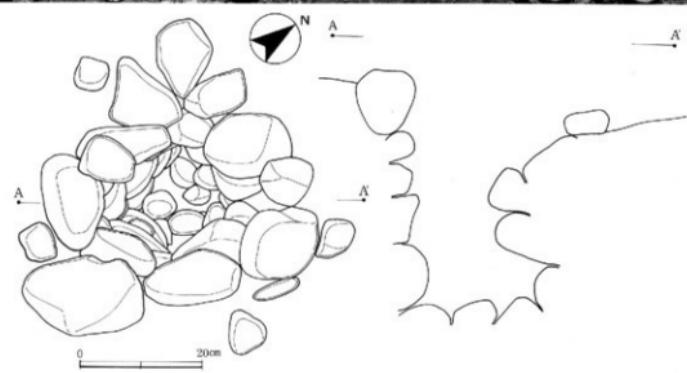
1. M, N, Q, R区IVk層上面
検出状態



2. Q, U区IV1層遺構検出状態



3. Q, U区IV1層石組み遺構実測図



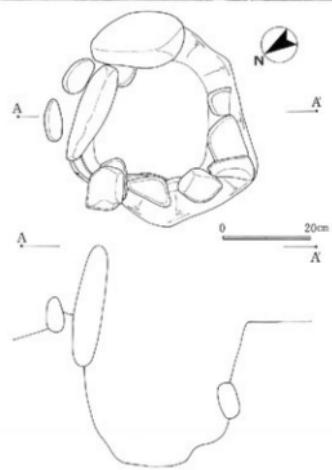
1. M区IVk層石組み遺構、大
洞A'式高杯(P-273)出土
状態



2. M区IVk層石組み遺構(No.1)
検出状態



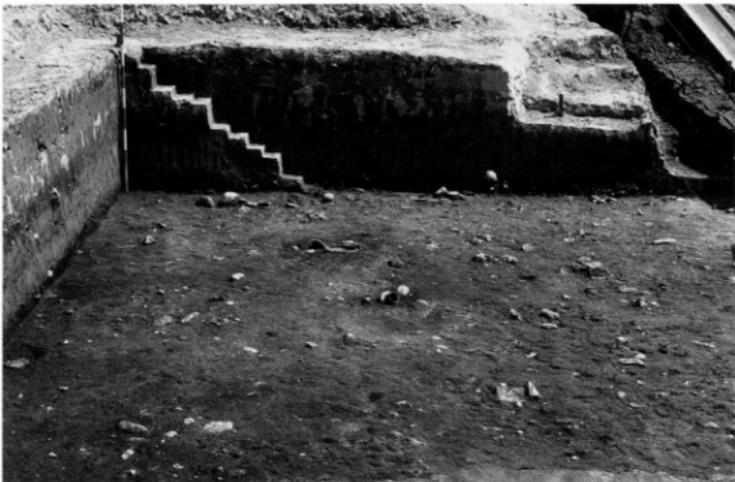
3. M区IVk層石組み遺構(No.1)
実測図 (左)



4. M区IVk層石組み遺構(No.1)
検出状態 (右)



第24図版
西区遺物出土状態



1. N, O, P, R, S, T区IVI
層上面検出状態（南から）



2. T区IVa層大洞A'式浅鉢(P
- 279)出土状態



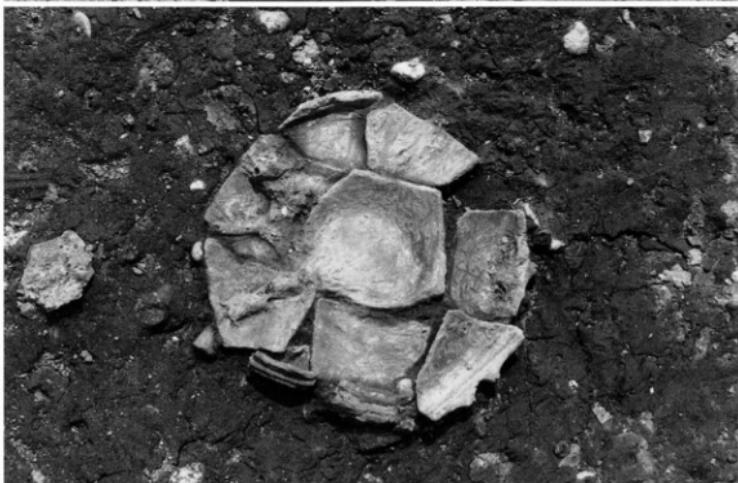
3. T区IVk層大洞A'式高杯(P
- 290, 291)出土状態

第25圖版
西區土器出土狀態

1. P區IV層大洞A'式高杯(P
—294)出土狀態



2. P區IV層大洞A'式淺鉢(P
—301)出土狀態



3. S區IV層大洞A'式壺(P—
292)出土狀態



第26図版
西区土偶出土状態

1. O区IV1層における大洞A'式
深跡, 土偶(0-104)出土状
態



2. O区IV1層土偶(0-104)出
土状態



3. O区IV1層出土土偶
(0-104)



第27図版
西区遺物出土状態

1. S区VI層土器(P-333)出土状態



2. P区V層ニホンジカ下顎骨
・骨質ポイント出土状態



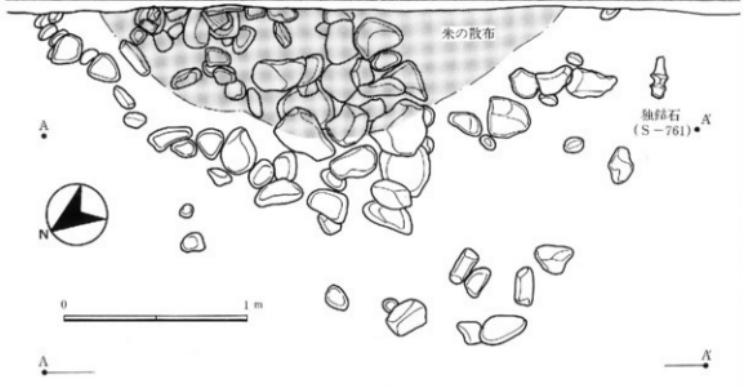
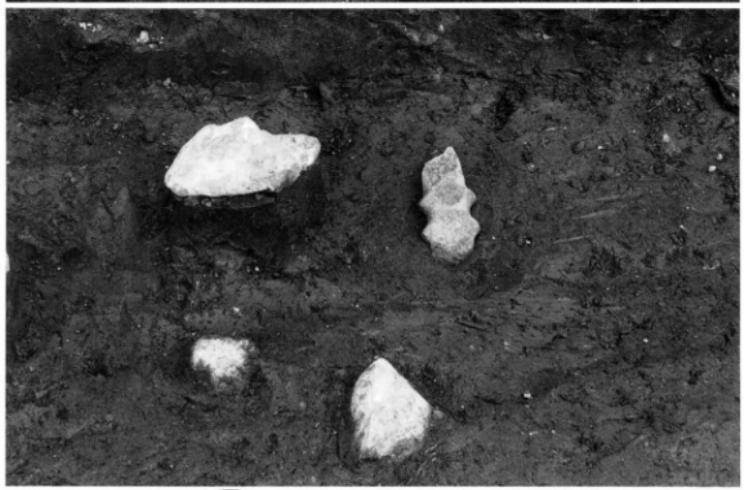
3. P区V層獣骨出土状態



1. P区IVm層石積み遺構検出
状態



2. P区IVm層における石積み
遺構中の独語石(S-761)出土
状態



3. 種群と木の分布範囲実測図

第29図版
西区土器出土状態

1. M区Vb層深鉢(P-319)出
土状態



2. M区Vla層深鉢(P-384),
壺(P-382)出土状態



3. VIIa層出土深鉢(P-386)



4. M区Vla層深鉢(P-386)出
土状態



第30図版
西区土器出土状態



1. O区VIk層遺物出土状態(手前からP-373, 372, 371)



2. O区VIk層跡(P-371)出土
状態



3. M区VIIa層大洞C2式土器出
土状態

第31図版
西区遺物出土状態



1. M区VIIa層遺物出土状態

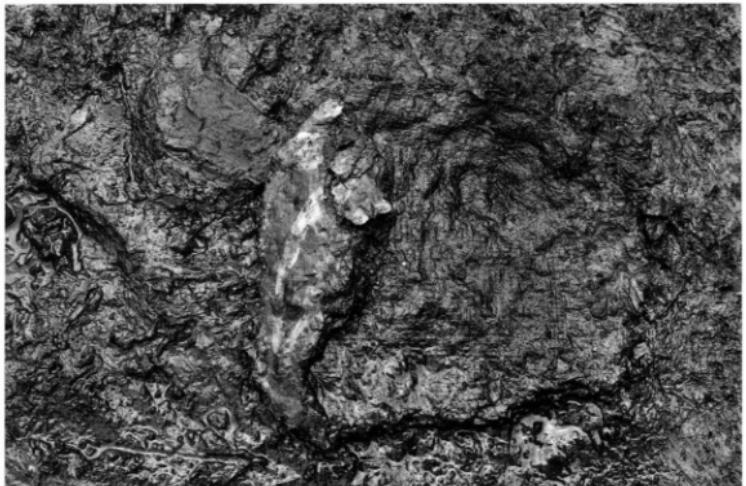


2. M区VIIa層大洞C₂式土器出土状態



3. M区VIIa層遺物出土状態

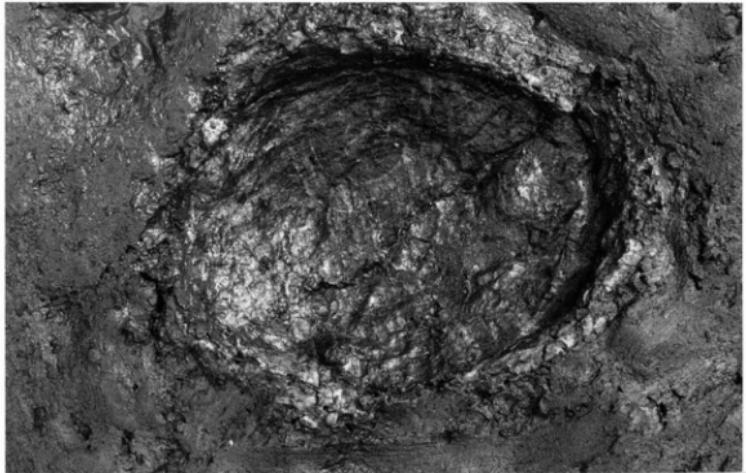
1. S区Vc1層における籠胎漆器(W-12)出土状態



2. O区Vc層彩文籠胎漆器出土状態



3. O区VI層出土籠胎漆器



第33图版
西区蓝胎漆器出土状态

1. R区VI b 层出土蓝胎漆器

(W—14)



2. R区VIb层出土蓝胎漆器

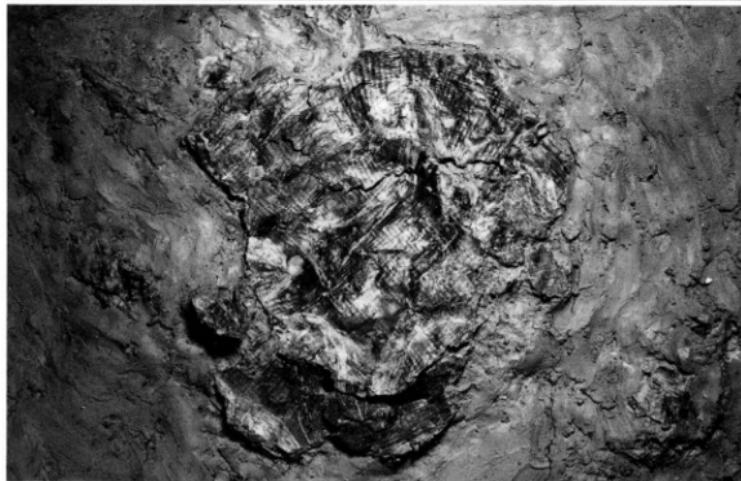
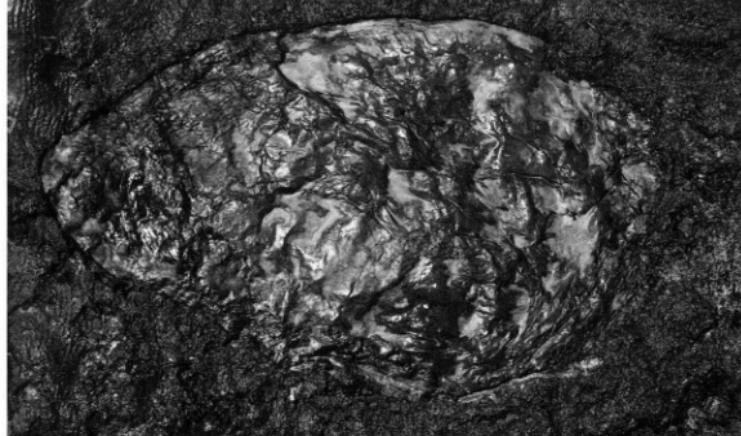
(W—15)



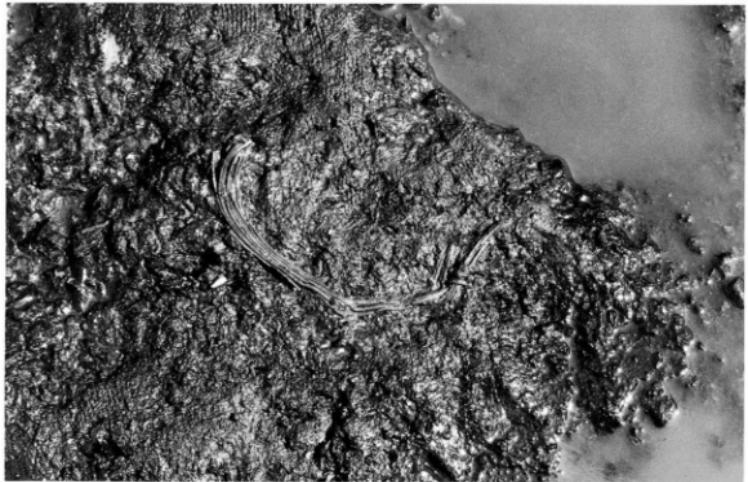
3. VI层出土蓝胎漆器



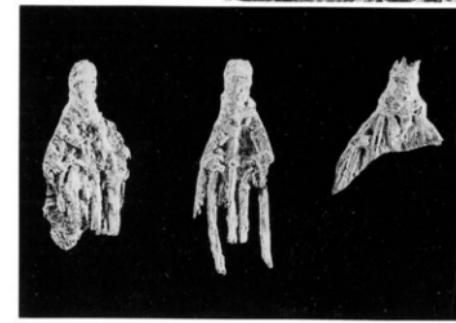
第34図版
西区塗胎漆器出土状態



1. N区VIf脛朱塗り紐(0-900)
出土状態



2. M区VIIa脛朱塗り紐(0-926)
出土状態



3. N区VIg眉出土櫛

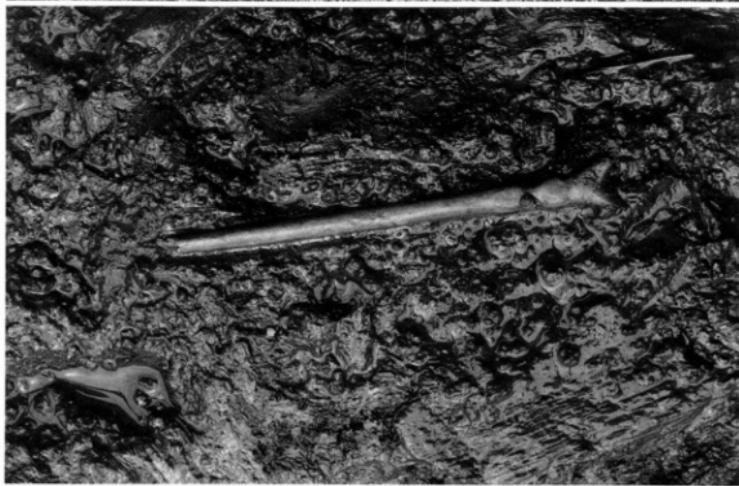


4. N区VIg眉櫛出土状態
(0-904)

第36図版
西区遺物出土状態



1. O区Vtg層骨頭部(O-907)
出土状態



2. R区Vc層骨製斐飾(B-53)
出土状態

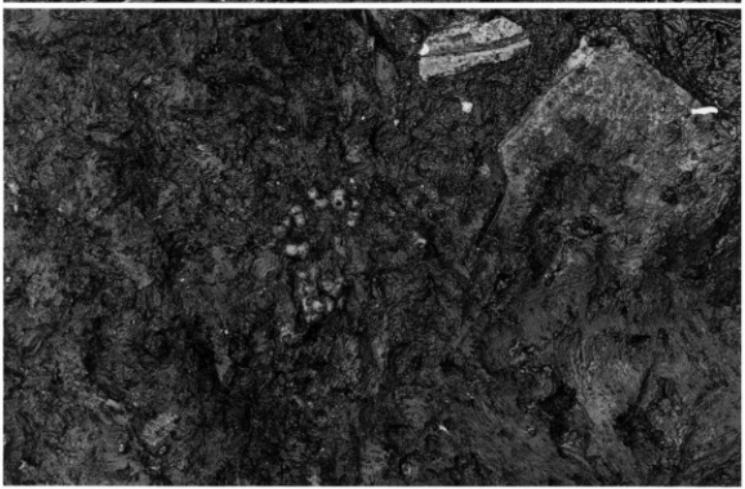


3. S区Vb4層における骨製ボ
イント(B-51), 骨製斐飾
(O-230), 石鏃(S-803)
出土状態

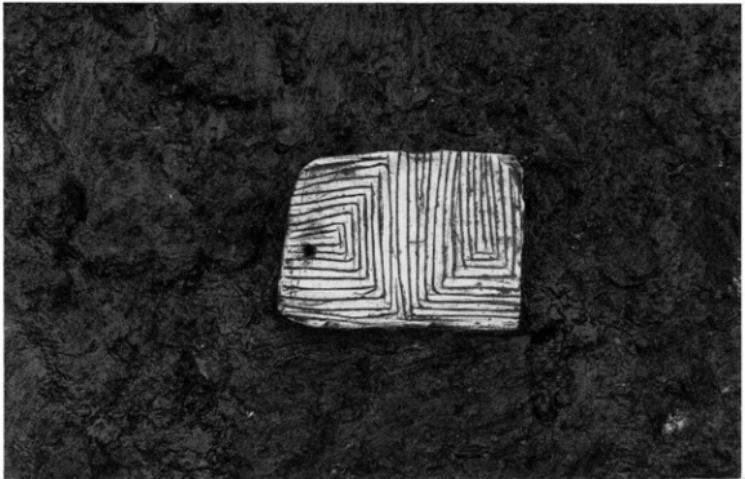
1. Vc層における獸骨出土状態



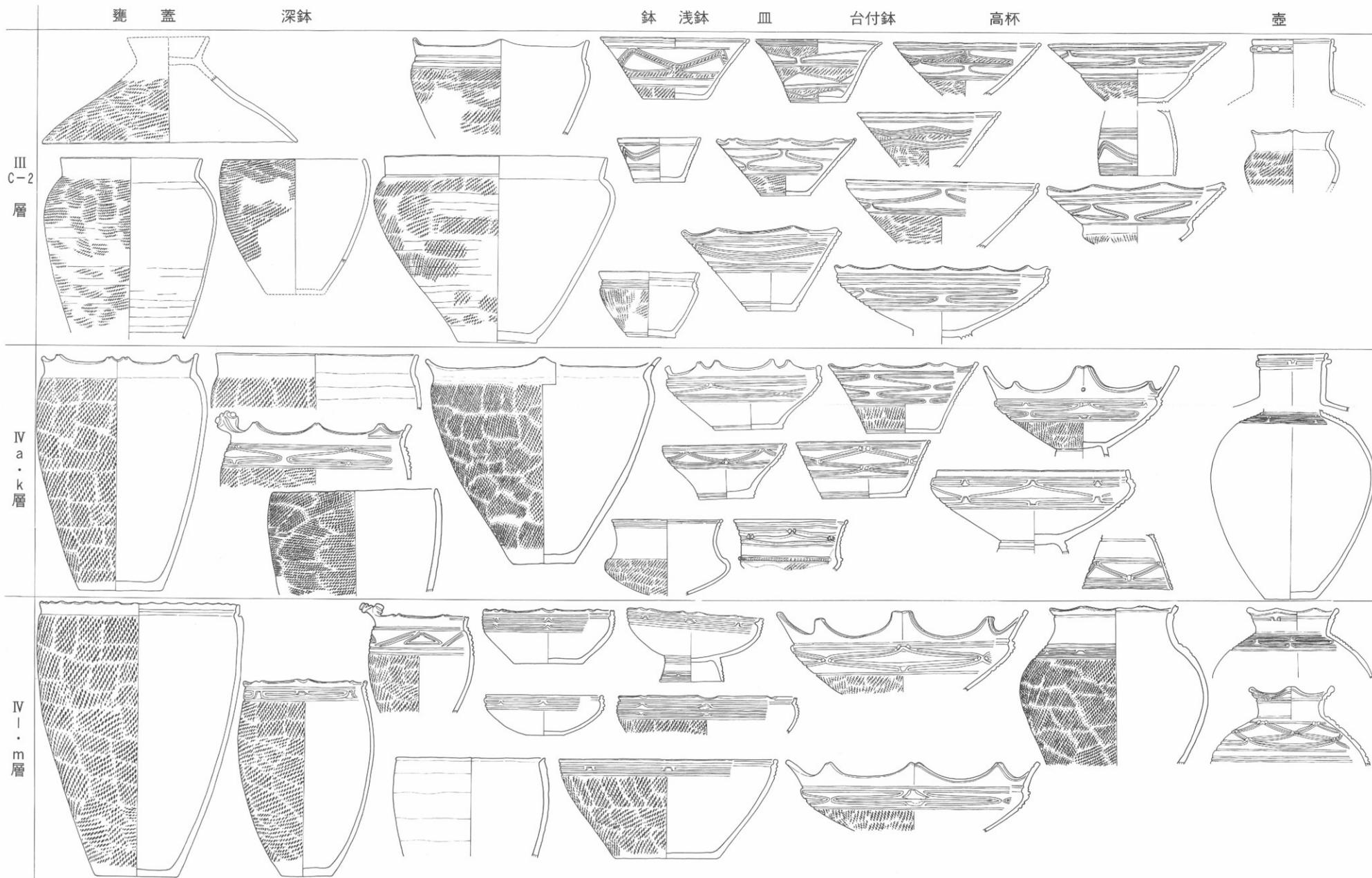
2. R区Vc層土製小玉(O-
505)出土状態
(24個が一括で出土した。)



3. R区Vc層土版(O- 507)
出土状態



付図1 山王廻遺跡層位別土器組成



付図2 山王廻遺跡層位別土器組成



昭和60年3月21日 印刷
昭和60年3月31日 発行

山王団遺跡調査図録

編著者 伊 東 信 雄
須 藤 隆

発行者 宮 城 県 一 追 町
教 育 委 員 会

印刷所 有限会社 平電子印刷所
美術写真印刷研究室
福島県いわき市平北台字下西 / 内13
TEL (0246) 23-9061(代)

凡丁本・添丁本にお取扱いいたします。

